

国会記事堂前で一ファシズムの波を押し返すために一

一昨年の9月から官邸前の反原発・脱原発の集会に参加してしていました。官邸前の集会参加者の数が減っていく中で、原発再稼働が進められていくのではないかという思いから、わたしは数に撒いて参加していたので、SEALDs が戦争法案反対の抗議集会を始めたころには、SEALDs は学生の団体で、主に学生を中心に呼びかけていたこともあって、国会前の方には行っていなかったのですが、ある日官邸前の集会が雨の予想でお休みになり、国会前「希望のエリア」ならやっているとのことで、そちらに行き、それが終わって、既に始まっていた SEALDs の集会に参加しました。「学生のひとは前に」とかいう誘導があったので、遠慮がちに参加したのですが、それでも結構年配のひとも参加していました。で、芸術性も感じられるラップ調のコールにも惹かれて、官邸前の集会が終わった後の SEALDs の集会にも参加し始めました。最初は、誘導を主催者の学生がやっていました。そのうちに、警察官が学生の誘導を押しつけて誘導を始めました。そして、人数が増えていくと、明らかに集会の規模を小さくする小さく見せる規制を始めたのです。SEALDs はカンパで運営しているのですが、最初のころはスピーカーをちゃんと備えていず、近くまでいかないとコールが聞こえないということもあり、またラップ調のコールは一種のパフォーマンス的なことがあり、側まで行って見ようということになります。そういうところで、SEALDs—シールズの集会が見える側へ集会参加者は行こうとします。それを、最初参加者が少ない内は一般的交通整理的なことだったのですが、参加者を増やさないという意向をもった警察の警備に変わっていったのです。シールズの側に行く道を警察がテープをはったり、スクラムを組んだりして封鎖し始めたのです。名目は、「もうシールズのいる側（北庭側）は一杯で、危険だから安全を確保するため」ということです。ところが、夜の集会で、早めに帰るひとがいて、出入りが激しいのです。だから、一時的にそれなりに「一杯」になっても、帰るひとがぞろぞろいて空いていくのです。「後ろを見ろ、空いている」と抗議していました。弁護士さんが見回りに来ていて交渉しているらしいのですが、今度は「指揮者と連絡が取れない」とかいう弁護士さんの話です。意味不明です。警備で「警察官のクーデター」でも起きているのではない限り、指揮系列が乱れるなんてあり得ないのです。シールズのコールに「憲法無視する総理はいらない」というコールがあるのですが、「法律無視する警察首だ」という話です。安全のための誘導などと称しているのですが、なんのための「誘導」か、「集会の規模を小さくする」という意図が見え見えなのです。そして、戦争法案の審議が山場にさしかかり、抗議の一が増えていくと、それを抑えるというところで、威嚇のための（暴力の行使も含んだ）逮捕、威嚇のための警察官の大量導入（まるで警察官のデモ）のような警備になっていくのです。実際に、インターネット上で、官邸サイドから警察に、「集会を規制して規模を大きくするな」とか、「車道に出すな」という指示が出ていたという話も出ています。こういう話は、オフレコで取材しているので、誰が言ったのか出てきません。そもそもマスコミのトップが首相と定期的にお食事会など

しているということも出ています。まさに「報道の自由」の自死行為です。

警察官は公僕です。給料は税金から出ています。首相や与党の私用の警備をやっているわけではないはずです。

そもそも、このような違法警備がなされたのは、官邸前の 2012 年の 20 万の大集会への、官邸サイドーその意向を受けた警察側の総括から来ているようなのです。それなのに、運動側がそれをきちっと押さえどう突破していくのかの道筋が見えません。今回の違法規制で、抗議の声をあげていたのは、70 安保世代が多かったようです。シールズのコールに「ファシスト通すな」というコールがあります。まさにファシズムの危機ということを感じていたからこそそのコールで、警察の違法とも言える警備に抗議していたのです。

8/30 に大結集を呼びかける国会周辺集会がありました。そのときの警備は意味不明の警備でした。車道を封鎖しておいて、歩道にひとが溢れているのに、車道にひとを入れないのです。このときは、シールズも「おしくらまんじゅう」的に規制を決壊させました。他のところでも決壊が起き、12 万の大集会になりました。

その後も、車道の意味不明の封鎖は続き、車道を解放すればいいのに、車道の中の警察の人員を増やすなどという「警察官の（威嚇）デモ」、そして明らかに威嚇目的の 13 名の逮捕という事態にいたります。

今回の大きな運動になっていったのは、反原発の首相官邸前の脱原発の集会の流れの中で、国会前でも集会が開かれていたからこそです。戦争法案への反対の運動とともに、まさにファシズム的な警察警備との対峙がそこにあったのです。戦争法案や戦争反対の運動は立て直せますが、ファシズムの波に飲み込まれたら、一切の運動が成立しなくなります。だから、このファシズムへの流れを押しとどめることもきちんと押さええて動いて行く必要があったのだと思うのです。

国会議員のひとが警察に抗議にいったという話はでていました。国会議員には国政調査権があるはずですが、警察がそれをけんもほろろに相手にしないというようなこともあったようです。そのあたりも含んで、もう一度反ファシズムということを押さえ直す必要を感じていました。